

中山外務大臣よりの長文の祝電が披露された。

講 演 「医学の進歩を支えるもの」 曲直部壽夫(本会会長)

特別講演 「オランダからの刺激」 司馬遼太郎 (作家)

曲直部会長の講演は実に多くの人々の努力と善意が医学の進歩を支えているかを具体的に話され、特別講演は最近オランダから帰国した演者がボンベのエピソードを交えた興味あるものであった。

長崎会場 平成二年十一月三日(土) 長崎大学医学部記念講堂

講 演 「ボンベと長崎」 羽田春苑 (日本医師会長)

「日本における医学のバイオニア・ボンベ」

H. Boukers (Leiden 大学)

特別講演 「シーボルトからボンベまで」 吉村 昭 (作家)

羽田会長はボンベが日本へくるまでの経緯について、ポイケル教授はボンベのバイオニア精神を強調した斬新な講演であった。吉村氏は二人の時代の相違と仕事の相違について話された。

最後にボンベ顕彰記念事業終了報告が、大滝、酒井によってなされ閉会となった。今回の記念事業が大過なく、無事終了できたことは、本事業を理解され援助と協力を惜しまなかった多数の方たちのお陰と深く感謝する次第である。

(大滝 紀雄)

古河歴史博物館の医史学展示品紹介

平成二年十一月三日快晴の文化の日に、古河市民長年待望の博物館が、出城跡地に、和蘭陀公使デイク・ファン・テッセン氏御一家の参列を得て見事に開館した。

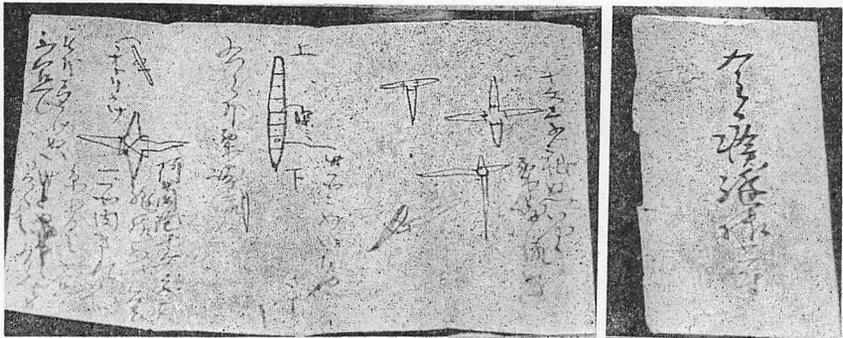
古河の地には万葉集の三歌があつて、崇神天皇皇子豊城入彦命の頃から開けた河沼に沿った町で、古代東山道文化圏にあつた。

平安時代末は平家八条院荘園に入り、鎌倉時代には源頼朝の片腕下河辺行平領地となつた。室町時代は古河公方(医聖田代三喜あり)の領であつたが、徳川時代から譜代大名の地に代り就中寛永十年土井利勝が佐倉城から十六万石で古河入城し、小笠原、松平、本多、奥平(前野良沢、福沢諭吉らの中津藩へ)、堀田(順天堂の佐倉藩へ)……の十指に余る藩の交代があつた。その中で古河の地と一番密着していたのは土井藩である。

この古河土井藩は天和元年鳥羽城に十年、元禄五年唐津城に七十三年の移封があつて、宝暦十二年再び明治まで古河に戻り在城した。

鳥羽城時代に京都にいた河口良庵(長崎カスバル医学創始者)の一番弟子河口良閑を召抱え、唐津城ではその孫河口信任が長崎に学び栗崎道意から免伝を得て後に古河城移封に従い、藩主土井利里の京都所司代に随行して京都で明和七(一七七〇)年人体解剖をして『解屍編』を刊行した。

河口信任は古河に帰藩後は少年鷹見忠常こと泉石に蘭学の手引



きをし、泉石は十五歳江戸詰小姓以後蘭学に励んで日本有数の蘭学者になった。

泉石は信任の孫信頼を杉田玄白に入門の手引をし、河口信頼の長男信寛は杉田成卿に入り次男信久は伊東玄朴に入った。

今回の古河歴史博物館は鷹見泉石の大きな資料を主体とする鷹見記念館でもある。片桐一男教授が泉石学術調査団長に当った。

医聖田代三喜と河口家累代の相当の資料は、四年先の古河主催日本医史学会（京都→東京→金沢→古河）の折に展示

を約して貰っているが、今回の開館での医史学展示に与えられたスペースは雀の涙の為、河口信任の次の五点きり陳列させて貰えなかった。

○河口信任が明和七年四月二十五日首一屍体二に用いた解剖刀二振り
 ◎河口良閑が河口良庵より頂戴の寛文六年阿蘭陀医学免許皆伝巻物一
 ◎河口信任が長崎で栗崎道意より頂戴の宝曆十二年南蛮外科免許皆伝一
 ◎河口信任著「解屍編」
 ◎河口信任の古河時代書き付け金瘡縫様書類（南蛮流縫合、阿蘭陀十文字縫合の仕様を自筆解説の極意伝）一（写真）の計五点のみ展示してある。

河口家累代の資料は豊富につき筆者は、累代の数点ずつ位は展示を希望したが、館長から与えられた陳列場が小さ過ぎた。ただし山椒は小粒でもピリッと辛く見応えはある。

（川島 恂二）

尾台榕堂百二十年祭——顕彰碑落成

平成二年十一月二十四・二十五の両日、新潟県十日町市において、同地の生んだ尾台榕堂の没後百二十年祭が盛大に挙行された。

尾台榕堂（一七九九～一八七〇）。旧姓小杉、名は元逸、字は士超、通称良作。江戸に出て尾台浅嶽の門に入り東洞流古方を、